

國學院大學學術情報リポジトリ

石山福治『支那語の手紙』と近代中国手紙本研究の
ための見取り図：歴史社会言語学研究の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 中国語の手紙, 尺牘, 歴史社会言語学, 石山福治, 中国語の敬語 キーワード (En): 作成者: 河崎, みゆき メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000214

石山福治『支那語の手紙』と 近代中国手紙本研究のための見取り図

—歴史社会言語学研究の視点から—

河 崎 み ゆ き

本研究は従来の尺牘研究の成果を踏まえながら、近年注目されてきた「歴史社会言語学」の視点から、1938年出版の石山福治著『支那語の手紙』を扱う。

1. 研究の背景

筆者は、中国語の中のジェンダー（河崎 2011）や、上海ピジンの研究（河崎2016）、および戦中日本の女子手紙の書き方本のジェンダーに注目し研究してきた（河崎 2016）。これらの基盤にあるのは社会言語学的視点である。そうした中、民国時代の女子手紙の書き方本をある日本の研究者から託され新たな研究課題とすることにした。女子手紙の女性性（有標の書き方）を考察するにも、まず一般的な手紙の書き方（無標の書き方）を確認する必要があるため、国会図書館のデジタルコレクションにある戦中に発行された石山福治の編集した『支那語の手紙』（1938）という中国語の手紙の書き方本を対象に考察することにした。つまり、本研究は民国女子の手紙本の研究の前段階の研究である。

社会言語学では、時間の経過という縦軸で言語変化を見る通時的研究と、同時代の言語変種という横軸で言語を考察する共時的研究がある。石山福治『支那語の手紙』を座標軸とし、通時的には現代のメールやビジネス文書にまで連なる尺牘の歴史と変化（諸星 2012）を考え、共時的には男女・あるいは日中対照研究の対象として、手紙の書き方本を捉え研究を展開していくことも可能だろう（図1）。

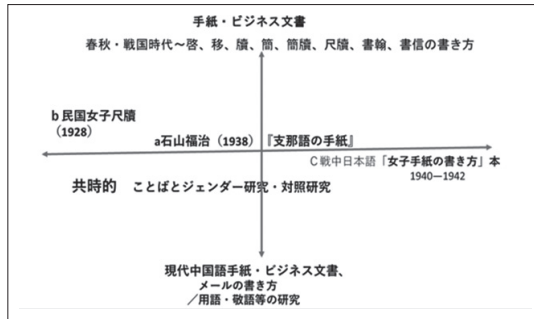


図1 通話的

2. これまでの尺牘（手紙の書き方）研究

劉（2013）によれば、中国における従来の尺牘研究は①書法の角度から、②文学の角度から、③文献学の角度から、④言語学の角度から、⑤書儀の角度からの研究なされてきたと言う。①の書法からの角度の研究は、尺牘を書道の風格や技法の面から考察するもので、慶旭『尺牘書法的歴史演変』（1994）、楊国『明代尺牘書法研究』（2009）等②の文学の角度からの研究は、尺牘を各時代の文学のひとつの文体と位置づけた研究で、趙樹功『中国尺牘文学史』（1999）、金伝道『北宋書信研究』（2008）等、③文献学の角度では、内容や時代、背景、作者の生い立ちなどを文献学的に分析するもので、王世偉『中国古代和近代の尺牘文献』（2002）、王安功『清初文人尺牘研究』（2005）等、④言語学の角度では、語彙、文法、音韻、修辞などを研究、各時代の特徴を研究したもので、蔣竹蓀『書信用語詞典』、姜玄玄『清代名人書札』尺牘専用語研究』（2009）等、⑤書儀（手紙の書き方の形式と模範を示した模範例文集）の面からは杜琪『書儀縁起蠡測及敦煌書儀概説』（2002）、汪永江『書儀章法簡論』（2012）等があると述べている。日本語では①に福田（2018）②に波多野（1989）④に三保（2019）⑤に波多野（1996）、山本（2017）、丸山（2018）などがある。ただし、それぞれ何らかの形で①—⑤が含まれているようだ。

筆者の考える歴史社会言語学的研究という視点も基本的には④の言語学的研究に属し、また⑤書儀の角度からの研究とも重なる部分があるだろう。従来の研究にジェンダーや対照言語学など社会言語学的視点を加えること

で新たな発見を期するものである。ここで「歴史社会言語学」について、簡単に説明しておきたい。

3. 歴史社会言語学とは

高田博行、渋谷勝己、家入葉子編著（2015）『歴史社会言語学入門—社会から読みとくことばの移り変わり』によれば、歴史社会言語学とは、「これまで行われてきた歴史言語学（Historical Linguistics）や個別言語の史的な研究（日本語史研究、英語史研究、ドイツ語史研究など。以下両者を合わせて歴史言語学とする）と社会言語学（Sociolinguistics）の視点と方法を統合しつつ、過去の特定の時代のことばや時間の流れの中で生じた言語変化を、その時代の歴史社会的な状況と関連付けて理解し、再構築しようとする言語研究の一分野」（p5）（下線は筆者による。）とした上で、「過去の言葉や社会を対象として、その言語変種、言語行動、言語計画などを明らかにしようとする分野である。」（p12）と説明している。具体的には言語変種、言語行動、言語生活、言語接触、言語変化、言語意識、言語習得、言語計画などがこれまでのテーマとして挙げられている（真田信治ら1992）。

さまざまな歴史コーパスが構築され大型データ処理が可能になったことで今後歴史社会言語学はより一層の発展が見込まれる分野でもある。中国の尺牘コーパスは未だ構築はされていないが、筆者は手紙本の研究は、言語変種や言語行動研究と関係があり、特にこれまで社会言語学の言語変種研究が扱ってきた①属性とことば（言語変異、階層差、男女ことば、年齢差、集団語②場面とことば（場面、待遇表現、スタイル）と言った視点を過去の言語現象に当てはめて考えることで新たな発見がもたらされると考える。尺牘（手紙）は時代の変化によって書き方を変えてきており、元来「誰が、いつ、誰に、どんなことばを、だれに対して使用するか」という社会言語学視点から考察するのに適した対象である。座標軸を決め通時的、共時的軸で見えていくことで、星図のように分布する各本の位置的見取り図ができてくると考える。

4. 石山福治（1938）『支那語の手紙』

石山福治（1938）『支那語の手紙』は八十年ほど前に、日本人・石山福治が編纂した中国語の手紙の書き方の本で、国会図書館デジタルコレクションで公開されている。本書を対象とする理由は預かった民国女子手紙の時代と近いこと、訓点付きではなく、中国語として手紙文を捉えていること、日本語での語句の解説や、手紙の翻訳があり、コンパクトで研究の入り口として取り組みやすいことが挙げられる。研究方法として、4—1. 書誌学的なもの、構成を可能な範囲で整理する。4—2. 本書の中の日中対照研究的な記述を整理する。4—3. 宛名署名のジェンダー要素を考える。5. 本書の中の待遇表現について考える。6. 格式（定型、常套句など）の継承を考える上で、台湾の手紙の書き方本と比較する。7. 波多野太郎(1986)『中国語学資料叢刊 尺牘篇』四十余冊の本との比較し、近代尺牘本の中でののおおよその通時的位置を探求する。以上の視点を以て本書を順にみていくことになる。なお、引用文は繁体字を用い、ゴシック体で区別する。

4—1 書誌学的、構成の整理

『支那語の手紙』は1938年東京の大学書林発行、全133頁、縦19cm、石山福治著。定価1円。小序あり、五章構成、附録ⅠとⅡを付す。

第一章総講（文体、敬称卑称と抬頭法、手紙の型、便箋など）、第二章（手紙の構成）、第三章定用句（宛名と署名、尊称、卑称、時令など）・解説例文には語句の【註】がつく。第四章（日常書簡文例）、第五章（商業書簡文例）。模範手紙文の訳は直訳ではなく候文体。附録Ⅰは年賀状や招待状、広告文、履歴書等の書き方。附録Ⅱは、尺牘漫筆と題し（イ）往年の手紙、（ロ）現在の往復文、（ハ）支那名士書簡で、著名人が石山に宛てた手紙を掲載。奥付の裏に大学書林発行書の広告があり内二冊に石山福治の名前が見える。

石山福治については、日本陸軍の通訳を務めたことが、本書122p「北清事變の當時、余が楊村兵站司令部に陸軍通譯として勤めて居たときに…」からわかる。李（2019）王（2016）よれば、石山は十九世紀末から二十世紀初頭にかけ非常に活躍した中国語教育者で、生年は1860年頃、1904年に近代日本最初の中日辞典である『支那語辭彙』を出版し、1934年に大東文

化大学の代理講師を勤めている。著作は四十三冊、政治類六冊、中国語学習類二十二冊、辞典十四冊、その他一冊、また七十八篇の論文を書いている。六角恒広『漢語師家伝——中国語教育の先人たち』には取られておらず、人物については詳しくわかっていない。

国立国会図書館サーチで検索すると石山の手紙の書き方本では、本書以前に『支那書翰文講話』（文求書店1915年、416頁）、『現代支那書翰文例解』（文求堂書店1924年、351頁）があり、約十年ごとに出版し、その度にスリム化している。『講話』の序によれば、中国で出版された新旧尺牘書二十種の内から材料を採ったとあり、『例解』の序によれば『講話』では日本人にとっては実用的でないものも含まれていたため削除整理したとある。本書『支那語の手紙』の小序によれば「日支関係は近來ますます緊密の度を加え支那語研究熱が高まりつつあり」、「支那語手紙文」を短時間に習得させること目的とし、「手紙文の一般的構造から初めて単語およびその用法を一讀、直ちに自家菜籠のものとなり得る様に組織。」している。本書が編集されたのは上海事変の一年後の1938年（昭和13年）であり、時代は日本が中国への侵略を進め、軍部や一般人を含め多くの日本人が中国へ渡っている。六角恒広編『中国語関係書目（1867～1945）』を見ると昭和十二年（1935年）から昭和十六年頃にかけて「早わかり、実用、簡易、速成、速修、ポケット、必携」を冠した中国語学習書が激増しており、手紙の書き方本においても、「薄型で速成」が求められたことが考えられる。以下、上記に挙げた研究の視点を加えながら本編を見ていく。

【第一章 總講】

（一）支那語の手紙の文體 1～2p

- ・日常通信文と商業通信文に大別できる。
- ・時代の進歩とともに駢儷體（古文調）から白話體（口語）に移りつつある・筆、巻紙から、洋罫紙、ペンに変わりつつある。
- ・標準的文體を求めるとすれば兩者の中庸を得たる「新文語體」を取る。（下線筆者）・正確にして簡潔を要す。
- ・相手に対する敬意と愛情を失わないこと。中国語では、礼法格式をやかましく言うので、常用語を選び、新奇を銜うとか手製の造語は避けるべき。

つまり、本書は主に日本文と商業文の書き方を解説し、文體は「駢儷體」

と白話体の中庸の「新文語体」を採用。常用語（手紙用語）使用を奨励している。附録Ⅱに二十年前の友人から来た手紙を引き、「読むにも書くにも大骨の折れる蛇足文」(p119)と酷評している。その意味では「新文語体」とは文語でありつつ「格式」を保ちながら無駄を省いた文体を指すと考えられる。実際の例を見て見よう。

(二) 敬稱卑稱と擡頭法 3p

・中国では敬稱卑稱は非常に厳格で、卑稱は小文字で書く。(例. 編み掛け②「弟」)。

某々仁兄^①台鑿久未晤面渴想殊深啓者頃聞名伶某某新自歐西而歸准於某日午後六時

至十時在某劇場特演新劇擬請吾

兄往觀屆時祈在

尊寓少留^②自當陪往也此即候

佳祺

弟某某手啓 某月某日

訳 (90p 觀劇に誘ふ文)

拝啓 久しく拝眉を得ず御景慕一入に候、陳者近日名優××氏欧州より新歸朝、××日午後六時より十時迄某劇場に於いて新劇公開の由、貴兄と共に觀覽支度候へば當日御在宅被下度、小生は勿論御供仕るべく候、先づは右まで

敬具

・擡頭法：相手に関する語に、行を改めるか一字開けて敬意を表すること(右①)。・支那語の手紙では句読点などは一切用いない。それは相手の無学を当てつける意味になるから注意すべきである。

ここでは、抬頭が親疎上下の敬意の別によって変わることに、句読点をつけないことを指摘し、次に手紙の正式な構造を示している。

(三) 支那語の手紙の型p4

支那の手紙には正式な型がある。相手との親疎により繁簡種々ある。ハガキ文、商業文は破格なものが多い。正式な型は次の順序。

- ①相手の尊稱②時候の挨拶、または久闊の挨拶③思慕の套語
- ④恭維の套語⑤頌揚の套語(⑥拝啓陳者に当たる定句)⑦用件
- ⑧まずは右までに当たる套語⑨乍末筆祈上候に当たる套話

⑩結びの套語⑪署名 自謙語 年月日

次の例は①～⑪に合わせて筆者が区切ってみたものである。

例

①某某執事雅鑒②久疏箋候③歉仄良深④辰維

⑤財祺康勝至為頌（前文）⑥敬啓者⑦鄙號所銷各貨向係由某號定購
年來行銷各處尚覺合宜乃近聞友人傳述謂
實號向亦各號定貨且價值廉平運送妥捷茲特呈貨樣若干種并開明花各
務望照單辨齊妥速運下該欸若干當即匯奉不誤倘各貨價廉而又合銷路
將來當源源交易也。（本文）⑧專此祇請

⑨臺安⑩不既

⑪弟某某鞠躬某月某日（末文）

前文

①某某執事雅鑒（御明察のごとく）②久疏箋候（ご無沙汰申し上げ）

③歉仄良深（申し訳なく思う）④辰維

⑤頌財祺康勝致以為頌（平輩への恭維語、ご清祥段）（本文）⑥陳者：
敬啓者⑦用件：敝号.....交易也

末文

⑧まずは右までに当たる套語：專此（まづは右まで）⑨乍末筆祈上
候に当たる套語：祈請臺安（末筆ながらご多幸をお祈り申し上げ
ます）⑩結びの套語：不既（不備、書かざるの意）

⑪署名 自謙語 年月日：弟某某鞠躬某月某日 p5

親密な間柄では②③④⑤は省略されることがあると言う。例文の内容は「委託購入の申し込み」である。日本語に比べ、本文以外の挨拶や結びのことばが中国語では豊富なことがわかる。また相手の名はできるだけ雅号を用い、差出人の署名、自謙語、日付けは構成上の重要な役割を持つと指摘している。

（四）便箋及び封筒

便箋：長さ七八寸、幅四寸赤い野で八行に引いたもの。藍色の野は弔事。差出人は表でも裏に書いてもいい「候回玉」はお返事を待つ意で封書の表に書く。切手は見苦しくなければどこに貼ってもよい、とする。

(五) 漢文と時文

時文（時代による文体）については、漢字を中心とするため「其の形式統一がすこぶる整然たるもので関係諸外国人がそれを学習するのには極めて容易である」が、文は従来の漢文とも違い、また漢字の意味が必ずしも日本語とは同じではないと指摘している（P10～11）。

4—2 語彙の日中対照的記述

第一章（五）には、日中で意味が違うと指摘する漢字112個が挙げられており、本書の特徴の一つともいえそうだ。一部をここで示す。

洋行（支那にある外国商店） 妻子（女房、妻） 親子（実子） 美人（米国人） 娘（母、母親） 利害（ひどい、甚だしい） 写真（写生するの意） 約束（取り締まるの意） 金山（メルボーン、濠州） 姪（甥） 御覽（陛下のみに使う） 中人（支那人） 千里眼（望遠鏡） 合同（契約、約束） 理屈（理に負ける） 洋火（マッチ）、花名（妓女などの芸名） 退院（還俗する） 東洋（日本） 法人（佛国人、フランス人） 華美（支那と米国） 書院（芸者屋、置屋） 寶貝（愛人、宝物） 勉強（辛うじて） 花子（乞食） 閣下（君、貴下）

（編み掛けは筆者）

編み掛けをした語彙は、現代中国語では意味の変化が起きているものである。たとえば、「親子」は現代中国語では日本語と同じように「親子」の意味にも使用されるようになっている。このように、石山の時代と現代とで意味が変化し、普通には使用されなくなったものには「美人（美国人）、中人（中国人）、千里眼（望遠鏡）、金山（墨爾本）、洋火（火柴）、東洋（日本）、書院（妓楼）」などがあり、時代を感じさせる。日中対照として意味が違うだけでなく、通時的な違いが生まれていることが見て取れる。

【第二章 構成】前文と後文） p16—34

石山は、中国語の手紙も拜啓…にあたる部分（前文）と、結語にあたる（後文）の型をある程度覚えて、用件をいれればそれで済むと指導する。

代表的な発信用文は次のようである。

△辰維○…仁兄恆祉咸亨○祺順萃吉——特肅燕函蕪函敬候○同玉並頌
○近安

【註】辰維（時に思ふに、謹んで思ふに）○…（先方の雅號または字）

仁兄（大兄、君一同等の人に対して用ふ。）恆祉（平常の福運）
 咸亨（皆よく通る、萬事好都合に進むの意）○（これはいずれも抬頭の印である。先方に属する事項に付き、我が國ならば、御とか貴とか尊とかを用ふる部分を支那では一字あけ又は抬頭するのである。以下これに準ずる。）祺順萃吉（ご都合よく取運ぶ。）——（この部分には差し当たり必要な用件のみを記入すること。）特肅（特に拝呈する。）
 蕪函（自分の手紙を卑称していふ）敬候（謹んで待上候）○回玉（御返事。）並頌（併せて祈上候）○近安（ご多幸、日常の御平安。）

確かに頭語と、結語表現を型として覚えていけばある程度、石山の言うように手紙文が書けるだろう。主な頭語、結語を次に示す。

表1. 主な頭語

思うに	伏惟 辰維 忽維以 敬惟 伏候
突然のお手紙を	忽奉 忽得麒函
久しく尊顔を	久隔 睽違 久違 不奉之字 久疏 仁兄相違 揖別
返信	敬悉 籍謚 忽奉蘭言敬謚 忽奉德音 頃荷雲函 奉到鈞諭 忽得麟函誦悉 頃接手書敬悉 頃來衆雲一敬知 頃開華札敬悉 捧誦之餘
その他	備荷 今日起居何 …老師大人夙欽 昨接手書 捧誦之餘 敬

表2. 主な結語

不○型	不悉 不盡 不莊 不宜 不悉 不一 不既 不載 等
○安型	近安 刻安 旅安 冬安春安、財安、日安、邇安、福安、文安、壽安、玉安 等
○祺型	潭祺 台祺 邇祺 冬祺
返信用	敬告 函達候 書餘面罄 回示 肅復 乞檢收賜覆是盼
その他	近祉 近佳 近好

最近中国の大学の研究者からもらうメールに「祝安」や「夏安」、「研祺（研究の成果が上がりますように）」と言った結語が書かれているが、一時期すたれた結語の使用が蘇っていることを感じる。

4—3 宛名署名とジェンダー

第三章 手紙の定用句では多くの套語套句と相手への宛名と署名(自称)を覚えるべきと指導している。

【第三章】(一) 宛名と署名p34～ 主な宛名と署名を挙げる。「**祖父母大人尊前**」が宛名で「**孫男 某々百拜**」が署名(自称)

祖父母へハ	祖父母大人尊前	孫男某々百拜	
父母へハ	父母大人膝下	男某々百拜	
伯叔へハ	伯叔父大人尊前 (伯叔母ナラバ)	父ヲ母トスル	姪某々首拜
長兄へハ	長兄大人待右 (二兄ナラバ長をニトス)		胞弟某々頓首
長嫂へハ	長嫂夫人粧次 (二嫂ナラバ長をニトス)		同上
胞弟へハ	賢弟手足	兄某々頓首	
弟婦へハ	賢弟婦粧次	同上	
妻室へハ	賢内夫人粧次	夫某々手泐	
子へハ	大兒或ハ長男	父字	
先生へハ	夫子大人函丈	受業門人某姓名百拜	
知友へハ	某仁兄大人閣下	弟某姓名頓首	
学生へハ	某々賢契如晤	友生某々手泐	

婦人が手紙をしたためる場合の呼称は署名が、祖父母へ「**婦某々郡孫女 檢衽百拜**」、父母へ「**婦某々郡女 檢衽百拜**」、伯叔へ「**婦某々郡姪女 檢衽拜**」、長嫂へ「**婦某々郡小姑 檢衽拜**」、弟婦へ「**婦某々郡愚 檢衽拜**」、夫へ「**妾某氏 檢衽拜**」になり、「**檢衽**」は襟をあわせるという意味である。

次に他人への宛名については「人ノ父ヲ令尊又ハ椿庭トイヒ、母ヲ令堂又ハ萱堂トイフ」、「伯叔父ヲ令伯令叔トイヒ」、「姪ヲ令姪」、「兄ヲ令兄、弟を令弟」、「子ヲ令郎令郎トイヒ、娘ヲ令愛 掌珠トイフ」、「妻ヲ令正尊夫人、妾ヲ尊寵又ハ如夫人」、「僕ヲ尊紀 台紀 盛价 盛伴」、「書記ヲ掌」、「婢僕ヲ尊使」、「岳ヲ令岳 令泰山」、「岳母ヲ令岳母 令泰水」。「婿ヲ令婿 令坦 貴東床」、父母共ニ全キニハ「具慶下ヲ用ヒ」、「父存シテ母没シタルは嚴待下」、「母存シテ父没シタル人ニハ慈待下」、人に対して自分の父のことを「家父、家嚴、家君」「母ヲ**家母**、**家慈**」、「已ニ死

セルモノヲ」それぞれ「家父、家嚴、家君」・「**先母、先妣**」と言うとし、妻を「**賤内 拙荆 室人 内人**」と示している。

編み掛けをした部分が女性の呼称である。ここから見れば宛先、自称共に上下の別だけでなく男女の差、存命か否かの差もあることがわかる。「膝下」は膝元で遊ぶ子という意味で、**襟衽**は「襟を合わせる」であり、ともに非言語的要素が加わることで丁寧さが加わることが興味深い。その他、ジェンダーの面から見ると、「妾ヲ尊寵又ハ如夫人」も注目に値する。中国では1950年の「新婚姻法」に重婚の禁止が盛り込まれ、妾を持つことが法的には禁止されたが、本書の時代1938年にはまだ公に存在が認められ、手紙の宛名にまで区別があることがわかる。

祖父母や父母の宛名に使われている「大人」は、昨今、中国のインターネットなどで、遊びやおだての文脈で使用され、例えば大学のクラス委員を「班長大人」と呼ぶ例もあり、筆者はそれを「和諧敬語（ハーモニー敬語）」と名づけ、現代中国語の敬語の穴を埋め、相手との関係性を柔らかくする（河崎2017）作用があることを指摘した。

以下【第三章】では（二）尊称と卑称、（三）十二か月の時令（時候の挨拶）、（四）宛名の下句とし「膝下（父母）、尊前、慈照、賜豎（尊長ニ）、閣下足下、執事、清照（平交ニ）、文几、如晤（卑幼ニ）、懿前、懿座（婦女ノ長輩ニ）、粧次、奩次（婦人ニ用フ）」などが揚げられている。

5. 『支那語の手紙』の中の尊敬語

【第三章】の（五）は套句細別で套句（常用の手紙用語）が分類整理されている。第四章は日常書翰文例、第五章は商業書翰文例と続くが、手紙文例の型は4で紹介した通りであるため、套句・套語を待遇表現の角度から整理したい。

5-1 尊敬表現、謙讓表現

尊敬語

尊称：大人 仁兄 大兄 仁兄閣下 仁兄足下 先生閣下 寶號台鑒
久闊：拜別 豊別（尊長） 久別 久違 久疏 睽違 幾年不見 豊裁
お手紙：嚴論 慈論 示諭 訓示（父母、師長） 鈞論 賜論 鈞函（上

長官)、蘭語 蘭言 華翰 華札 雅翰琅函 雲函 芳函 惠函 臺示
(平交)、來信 來札 來書 手書 來函 (長幼平交)、來稟 稟函 (子)

ご尊顔: 慈顔 鈞顔 (尊長)、芝標 芝顔 臺顔 叔度 雲宇 鴻儀
碩範 蘭儀 (平交)、懿範 (婦人長輩)、芳儀、芳容、蘭儀 (婦女平交)

頌揚句: 慈躬康健、大人財通 先生鼎重如山 泉流若海 先生豊祉増祥
蘭室増祥

御明察: 崇照 (万時御明察願申上候) 崇鑒 遠照 朗照

お教え: 慈訓 嚴訓 (父母)、鴻訓 塵教 (先輩)、雅教 臺教 指教 蘭教
金玉 (平交)

思慕、望む: 邇祉想益、安欣慰之至 竚望光臨 葭思 隆徽康裕

お返事をお待ちします: 鴻音、回玉 賜復、希賜嘉音

お宅: 貴府 華堂 華廈 台階 龍門 崇階 龍門 銀閣

ご光来: 光臨 光降 駕臨 惠臨 お納めください: 伏望笑納 晒留
御許しを: 原宥 原諒 原鑒 原恕

ご自愛ください: 自珍玉體 慈躬珍攝 (尊長) 順時珍攝 珍重自愛 (平
交) 慈鑒 慈照 (尊長) 鈞鑒 賜鑒 (先輩) 臺鑒 臺照 月照 懿鑒 (婦
人長者) 菱照 (婦女子間平等)

お祈り申し上げます: 恭敬 敬請 肅請 恭候* (先輩及貴客等) 跪請
跪叩 (師傅父母)、順候 敬候 籍請 (同等, 相互)

ご多幸を: 慈安 (父母 尊長、師傅)、雙安 (父母、尊長夫婦同在者)、
鈞安 (尊長客友通用) 臺安、文安、福安、日安、財安 近安 (平交)

ここから見ると父母へは「慈」が使われ同等へは「鈞」が、年上の女性
には「懿」、女性同士は「菱」が使用されることがわかる。

謙讓語

思う: 伏惟 辰維 敬悉 專肅 忽維 敬維 敬啓 忽奉

お手紙受け取りました: 適奉手札 頃接手書 頃開華札開 特肅 (特意
拜呈) 肅此 肅書 肅懇 恭念

手紙: 荒函 魚書

返事用: 草此泐候 晒是荷虔候 崑函達候 先此肅候 專肅奉懇 敬候
專此敬復 謹此怖復 伏祈檢納

比喩表現と敬語

こうした手紙表現には豊富な比喩的表現が使われ、「新文語体」の敬意と風格を維持しているようだ。主な例を挙げる。

相手の手紙：鴻音 華涵 華札 燕音 芳緘 蘭緘雲函 麟函 回玉

自分の手紙：魚書 荒函、朗報：鵲報 鯛柬

他の表現：星旋（故郷へ帰る）茅塞頓開、雲山修阻 魚雁鮮通（通信があまりない）、将来浮雲漸退 旭日重光（問題も解決するでしょう）、令尊大人跨鶴仙遊（逝去）、聆音雀躍 從此梯雲月（大学に合格されたと聞きました）

本書の手紙文の中には、非常に豊富な敬語、謙讓語表現と結びついた比喩表現があることがわかる。

5—2 同時代の待遇表現（敬語体系）の問題について

当時の中国語敬語表現を考える上で、彭国躍（2002）の研究を参考に検討を行う。彭は、比較認知言語学の角度から、中国語の敬辞体系の崩壊が始まる時期と消滅のプロセスと原因を、『三国演義』（1320）など四大名著から、『兒女英雄伝』（1849）、『困城』（1946）『平凡的世界』（1988）『白夜』（1995）に至る十四世紀から二十世紀に書かれた三十冊の口語体長編小説から形容詞型の尊辞と謙辞を抽出し、最も多く使用された上位二十の尊辞（尊、貴、令、大、賢、高、盛、厚、清、上、雅、芳、明、美、鈞、聖、良、威、華、豊）と謙辞（敝、小、愚、賤、薄、寒、微、拙、貧、卑、下、鄙、浅、窮、荒、劣、寸、俗、粗、淡）を時代的推移で図表化した。その結果、中国語の敬辞衰退は、文革時期（1966～1976）に始まったわけではなく、清王朝の崩壊、辛亥革命の勃発、中華民国の樹立の1919年の五四運動の発生の時期と重なっていることを見つけた。これは儒教（君臣、父子、男女、上下、尊卑をわきまえる思想）を中心とする伝統的な世界観、価値観、礼儀礼法の崩壊と関係していると指摘する。一方、石山の『支那語の手紙』（1938）は前項で整理した通り、豊富な敬語表現が使われており、これは小説の中で敬辞が消失しても、手紙の中ではさらに残って来たことを示しているのではないだろうか。石山は「新文語体」の詳しい定義はしていないが、蘭や鴻、芳、雲、麒、玉、龍など名詞接辞には自然界の美しい動植物が使われ、風格を醸し出している。

附録Ⅱで当時交流していた中国人たちとの交友の手紙を紹介しそのうち2通は新文語体のようだが、次の例は五四運動で提唱された白話体(口語の)手紙文になっている(p125)。

石山福治先生

您来信说起支那語研究法購買的事，這本書，我在一年前，由日本買過回來一部的。拜讀一遍好極々々其中一两篇，已經譯成華文使大家得些益處。這一類的書，以後希望常々、有得 出版纔好。去年由日本郵便局寄去『國語統一問題』和『什麼是國語？什麼是国音？』兩篇文章收到了麼？您對於他們有什麼意見，極希望指教的

現在有几个問題我是急要知道的请您也用快信詳細告訴我，很感激的

- (一) 日本拿東京語做国語，有什麼理由？
- (二) 日本國語運動的經過怎麼樣？請詳細說明他
- (三) 日本拿東京語做國語有什麼人反對？倘若是有的請說明他的理由？
- (四) 有没有国家命令或文部省正式頒布的日本語詞典或字典麼？
- (五) 日本国標準語的界說怎麼講法？

您是對語言既有研究的人對於中日兩國的國語曾經研究過了所以要請教您答復這幾個問題想必可以的可以的順便給您請安！

周銘三 十ノ四ノ二十三

この手紙は、相手(石山)の敬称も「先生」であり、本書で示された面倒な頭語、挨拶・思慕、頌揚などは省かれ、「先生がお手紙の中で言及された研究書の件ですが」とすぐ本題にと入っている。結語は辛うじて「請安」で結ばれているが、抬頭や差出人に付く卑称や百拝など套句もない。手紙の内容は、東京語がどのような経緯で共通語になったのか反対意見や、日本の国語運動の過程、日本語の標準語の定義などを箇条書きで熱心に問っており、中国の共通語選定の過程において日本語の共通語制定を参考にしようとしていることがわかる。

石山も「以前は相手方を大人老爺と慣用していたが、民国以来大抵は先生の一言。擡頭もなくなった。」(p122)と書いており口語化、簡略化されていることを知っている。以上のことから、石山の言う新文体は当時としては先進的な知識人が手放しはじめた文体であることがわかる。

6. 台湾での継承

本書の考察に当たって、台湾・香港で育った日本の大学の中国人教師に確認してもらったところ、中国語としての間違いはなく、台湾では今でもこうした手紙の書き方をしているということだった。現在の大陸ではすたれた手紙の書き方を台湾では一部継承していることになる。そのことを確認するため、台湾人の洪樵榕氏が昭和五十九年（1984）に著した『尺牘探求—中文手紙の書き方』と比較してみた。洪は、尺牘は「前文（称号、挨拶）、本文、後文（珍重語、請安語、姓名、月日）」からなるとし（p19）、この構造は石山の手紙の構造とほぼ同じである。

例) 上母親書（報告近況）（洪1984、p25）

母親大人膝下.. 敬稟者，遙隔

萱幃，正深孺慕，忽奉

慈訓頒至，如獲珍寶。拜讀之餘，敬悉一是。

欣聞

玉體康泰，深以為慰。女體素柔弱，日前雖染感冒，現已痊愈，

請弗

錦注。（中略）順此奉稟，以免遠念。

肅此，恭請 福安

女 某某 叩稟

意味は、「お母様へ深くお慕いたしております。慈愛ふれるお手紙をいただき、珍しい宝物を得たように嬉しゅうございました。お体恙なきことを伺い安心いたしました。どうぞご心配なきよう」と言う意味で「玉體」や「錦注」などの比喩が使用された敬語表現で、結語も「肅此恭請 福安（ここに謹んでお幸せとご健康を祈り申し上げます）」で、差出人の卑称も「女某某叩稟（娘 叩頭して申し上げる）」と石山の言う新文語体とよく似ている。ただ、句読点が打たれている点は、石山の書き方とは異なる。

6—1 洪の挙げる用語

洪は尺牘用語として三十一種類挙げている。代表的なものを例示する。（p35—101）

①稱謂語：仁兄②尊崇語：膝下、鈞鑒③啓事語：敬稟者、叩稟者④
受信語：頃奉手諭⑤恭惟語：伏維⑥思慕語：時深孺慕、每企蘭闈⑦
起臥語：起居康吉⑧頌美語：為頌為慰⑨稱贊語：瞻企慈暉⑩問訊語：
相邀鈞鑒⑪欠信語：久疏蘭訊⑫離別語：叩別慈顏⑬懇願語：為幸為
禱⑭真情語：肅函敬祝⑮珍重語：伏祈玉體⑯承寵語：辱在愛下⑰通
報語：知多錦注⑱求（請）諾語：如何荷惠充⑲光顧語：魚軒⑳尊宅
語：貴府㉑推挹語：照應㉒恐縮語：抱歉良深㉓贈与語：薄禮㉔受領
語：笑納㉕感謝語：不勝感謝㉖臨書語：臨書翹切㉗待復語：恭候玉
音㉘陳述語：肅此上稟㉙請安（末尾）語：妝安、旅安㉚名末（結）語：
叩上、頓首、敬白㉛補述語：再稟者

『支那語の手紙』は～句とし三十余あり、分類は多少異なるが、用語自
体はかなり似ている。

同じ昭和五十九年に出版された大河内康憲ら著の『中国語書簡文表現辞
典』と比較してみると違いがよく分かる。

実用例4（p68）

××先生

欣闻令郎以优异成绩考试和歌进入某某大学，兹像您及令郎表示热
烈祝贺。（中略）

此致

敬礼

××××

年 月 日

相手の令息の大学入学を祝福した手紙だが、宛名は「××先生」だけで
あるし、結語は「敬礼」の一言で石山や洪のような面倒な形式もない。煩
雑な手紙の用語は一般大衆には覚えにくいだろう。格式は大陸では継承さ
れず、むしろ台湾に残っていることになる。国民党や資産家階級が逃げた
台湾や香港ではいまだに一部清国の儀礼や法律が残っていることは香港
「林鄭月娥」行政長官の姓が夫姓と実家の姓から成り立っていることから
もわかる。

7. 近代の通時的軸のなかでの本書の位置

書簡の歴史については五世紀末『文心雕龍』書記篇にあり、波多野(1989)「尺牘の禮贊」によれば、尺牘の「格式」は宋代に始まり明代に安定したと言う。佐藤武敏(2006)『中国古代書簡集』には春秋時代から後漢までの三十四篇の名書簡が採録されているが、前漢になって李陵から蘓武への手紙に「子卿足下—李陵頓首」が見え、司馬遷の「報任少卿書」は「太子公牛馬走司馬遷再拜言。少卿足下」と書き始め「書不能悉意。略陳固陋。謹再拜。」と結んでいる。揚雄が劉歆に与えた書では「雄、叩頭、」で始まり「雄、叩頭、」で終わるが、これらはまだ特に定まった形式ではなかったようだ。

波多野太郎(1986)『中国語学資料叢刊 第三篇』にある四十四冊の尺牘本と石山の『支那語の手紙』を、本の構成や、項目立て(分類法)、套句(手紙用語)などを比較し本書の時間軸上の位置を検討してみると、約四十冊が本書より以前の出版物である。

実質上、収載2の『居家筆用事類』(1673年、松柏堂重刊)が『叢刊』の中で一番古く、「格式」がすでにあり、階級職業別による用語の差について詳しい。また同3『新鑄時用通式翰墨全書』(王宇編、明1626年、孟春・田原甚左衛門1643年重刊)も宛名、敬称、結尾を解説しており、「格式」が江戸の寛永年間には伝わっていることがわかる。波多野によれば、5『尺牘諺解』(1680年)が日本人によるはじめての完備した尺牘解説書だ。

14『尺牘粹金』(明治十一年1878年藤田久道、二書堂刊)まで、ずっと訓点が施されており、明治初期は訓読したことがわかる。石山は、訓点をつける読みは絶対に罷むべきだと主張しており(p119—120)、ここから石山の言う「新文語体」は中国語読みだとわかる。

15『新增尺牘初枕』(光緒十二年1886)から俄然文体や「格式」は似てくるが、套句の分類や、本の構造、頭注の有無や、呼称だけのものや、商業文だけの物など本としての形式は各々違っている。

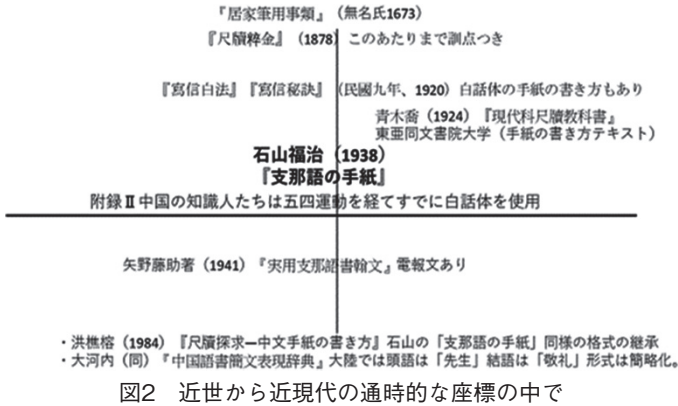
特筆すべきは27『寫信白法』(民國九年、1920大陸書局)、28『寫信秘訣』(同年、上海世界書局)で、すでに白話体の手紙の書き方が取り上げられている。五四運動の翌年であり、白話運動を受けてのことであろう。

34岡本正文・橋川浚共著の『支那書翰初歩』(大正十二年1924)上編「文

體」で「現今支那文體は実に乱雑を極めて居る。殊に書翰文に於て甚だしい。(中略) 近年來青年學者によつて文學革命が叫ばれ白話即ち口語文體の物が盛んに提唱せらるゝやうになつて今日の乱雑を現出したのである。(中略) 口語文體に至つては未だ一定の型體整わず、(中略) 邦人が初めて支那書翰文を修めんには、上述のごとき平明な文語體の物から入り、その用語・様式の我が書翰文のそれに似通つてゐる点に着眼したならば、案外容易に會得できようと思ふ。」(p1—3)と書いており参考になる。ここから見て、石山も本書を著すにあつて、型がまだ定まっておらず日本人が学びにくい白話體(口語體)の手紙の書き方ではなく、無駄を省き、前文、後文に套句を配していけば手紙らしくなる「新文語體」を選んだのではないだろうか。石山(1915)の手紙本『講話』では「通俗體」と呼んでいる。ちなみにほぼ同時期の昭和十六年(1941)出版の宮島貞亮・高森強太郎共編『註解支那時文類編』の尺牘の部によれば、尺牘の文体には「散文體、駢體、通行體(古體、今體の別アリ)、白話體」と分類が示されているが、果たして石山の言う「新文語體」が「通行體」の古體を指すのか今體を指すのかは今のところ定かではない。

また、43『現代科尺牘教科書』(青木喬編。大正三年1924、東亜同文書院刊)は東亜同文書院の學生のために編纂されたもので、解説はカタカナ漢字交じり文で「近來尺牘中白話體ヲ用キルモノアリ殊ニ家庭間ニ用キルモノヲ然リトス。(中略) 本書ニハ之ヲ収録セズ」と明確に断つてゐる。本書から3年後刊の『實用支那語書翰文』(矢野藤助著、大學書林、昭和十六年1941、『叢刊』第四篇収録)では第一章に電文(電報文)の書き方があり、機器の進化に対応した編集内容になっている。

以上から見て江戸時代には明の格式や用語がすでに入つて來ており、石山の『支那語の手紙』はこれを受け継ぎながら、五四運動で提唱された白話體の手紙には飛びつかずに、「さりとして無駄なことばの多い駢儷體」でもなく、日本人が学びやすい新しい文語體を用いたと考えられる。またそれは、附録Ⅱで石山の友人で蒋介石の部下が使用している文体であり、つまり、公的機関ではまだ白話體ではなくこうした「格式」に則つた「新文語體」の手紙の書き方がある程度続いたことが考えられる。詳しくは今後の課題としたい。



8. まとめ

石山（1938）『支那語の手紙』では、手紙の構造や常套語句、模範文例が日常通信文と商業通信文とで示され、文体は清朝から民国あたりの文語文から無駄を取り去った「新文語体」を採用している。次に、彭（2002）によれば、小説の中の敬語体系は1919年の五四運動頃に衰退していったとするが、1938年出版の本書の手紙の中の敬語表現は大変豊富であり、手紙文ではある程度長く保たれた可能性がある。小説と違い、手紙では直接相手に対する敬意を示す必要があるからだ。そのため、手紙では小説よりは遅れて、家族間の手紙以外、公的な文書ではおそらく1949年の新中国成立あたりまで続いたのではないだろうか。一方で附録Ⅱの周銘三の手紙のように知識人たちはいち早く口語体の手紙への切り替えを始めていたと考えられる。また洪（1984）の手紙の書き方から見て、中国の大陸ではすでにすたれた「格式」が、台湾や香港では中国の伝統的作法として継承されているのだろう。

中国の経済発展、サービス業の興隆とともに、中国の言語使用上の再封建化の動きはあちこちで観察できる。石山の手紙の書き方のような文体へまで戻ることはないだろうが、一部の知識人たちはすでにこうした文雅な用語好んで使用することもあるようだ。

本書『支那語の手紙』は、コンパクトな本であるが、当時の手紙の書き方はもとより、対照言語的な記録、手紙用語の上下、男女差、附録「尺牘

漫筆」の交友の手紙から当時の日中の「共通語規範化」の問題、社会言語学でいう言語政策の席次計画、共通語制定のためにどのような問題に関係者が目を向けて来たかも伺い知れる。

今回、筆者が行ったのは近代の中国語手紙本研究のための基礎研究であり、その入り口として本書を見て行った。十分ではないが、ある程度、近代中国語手紙本としての特徴や近代尺牘の中での通時的位置をつかむことができたと考える。次に筆者が目指すのは共時的に女子手紙の書き方との違いを探っていくことである。今回調査した『中国語学資料叢刊』の四十余の尺牘本の中に「婦人用語」などといった女性の手紙の書き方に言及しているものもあり今後は、それも参考に、本書を一つの座標軸として捉え、民国女子尺牘本との比較の中で、社会言語学が注目する「ことばとジェンダー」を考察し、新たな歴史社会言語学研究成果につなげていきたい。

参考資料

(日本語)

- 石山福治 (1938) 『支那の手紙』 大学書林
 石山福治 (1915) 『支那書翰文講話』 文求堂書店
 石山福治 (1924) 『現代支那書翰文例解』 文求堂書店
 洪樵榕 (1984) 『尺牘探求—中文手紙の書き方』 二松学舎出版部
 波多野太郎 (1986) 『中国語学資料叢刊 尺牘篇』 一一—四卷
 波多野太郎 (1989) 『中国文学語学資料集成』 第三篇 第1巻

参考文献

- 王雪 (2016) 「明治時代における日本人が編纂した中国語辞典の研究」 WAKUMON 69、pp69—81
 河崎みゆき (2011) 「中国の若い女性のことばを探る—中国男女口癖調査を中心に」 『日本語ジェンダー学会誌』
 河崎みゆき (2016) 「アルヨことばの周辺としての上海ピジン」 『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ2015報告論集』
 河崎みゆき (2017) 「上海蔵書楼に残る戦時『女子手紙の書き方』本のジェンダーを考える」 日本語ジェンダー学会第18回年次大会要旨
 佐藤武敏 (2006) 『中国古代書簡集』 講談社

- 真田信治・陣内正敬・渋谷勝己ら（1992）『社会言語学』桜楓社
- 高田博行、渋谷勝己、家入葉子（2015）『歴史社会言語学入門』大修館書店
- 波多野太郎（1989）「尺牘禮讚」『中国文学語学資料集成第3篇』不二出版
- 波多野太郎（1996）「尺牘の格式の歴史」『波多野太郎博士覆印語文資料提要』不二出版
- 波多野太郎（1996）『覆印語文資料提要』不二出版
- 福田哲之（2018）「手紙がひらいた書の文化—木簡から紙へ」『漢字文化の受領—手紙を学ぶ、手紙に学ぶ—報告集』奈良女子大学古代学学術研究センター． pp. 53—70
- 彭国躍（2002）『近代中国語の敬語システム』白帝社
- 諸星美智直（2012）「日本語ビジネス文書学の構想—研究分野と研究法」『国語研究』第七十五号
- 丸山裕美子（2018）「月儀と書儀—書の文化と手紙の文学—」『漢字文化の受領—手紙を学ぶ、手紙に学ぶ—報告集』奈良女子大学古代学学術研究センター． pp. 41—49
- 三保忠夫（2019）『尺牘資料における助数詞の研究 明国から日本へ』武蔵野書院
- 宮島貞亮・高森強太郎（1941）『註解支那時文類編』慶應出版社
- 山本孝子（2017）「手紙作法—書儀の實踐應用」『漢字文化の受容—東アジア文化圏から見る手紙の表現と形式—報告集』奈良女子大学古代学学術研究センター． pp. 1—17
- 六角恒広（1968）『中国語関係書書目』早稲田大学語学教育研究所
- 六角恒広（1999）『漢語師家伝—中国語教育の先人たち』東方書店
（中国語）
- 河崎深雪（2017）《汉语角色语言研究（中国語の役割語研究）》商務印書館
- 李晶鑫（2019）「石山福治（IshiyamaFukuji）的生平及著作」『中国語研究』第61号白帝社
- 劉延玲（2013）「上海図書館蔵明代尺牘書信用語研究」湘潭大学修士論文

〔キーワード〕 中国語の手紙、尺牘、歴史社会言語学、石山福治、中国語の敬語